

# ビデオ 通信

2022年  
1月17日(月)  
No.4536

月・木曜日発行  
月額：¥11,000(税込：¥11,880)  
発行：飯澤剛  
編集：齋藤浩一

**ユニ通信社**

〒114-0024  
東京都北区西ヶ原 3-57-17-202  
TEL：03-5422-7515  
FAX：03-5422-7516  
E-mail：vt@uni-press.net

パナソニック映像

## 8K映像『ART 歌舞伎—自らの存在価値を求めて—』を制作

「ART 歌舞伎」× 8Kによる新たな映像表現



パナソニック映像㈱が制作した8K映像『ART 歌舞伎—自らの存在価値を求めて—』が、昨年開催された先進映像協会 日本部会「ルミエール・ジャパン・アワード 2021」8K部門で特別賞を受賞した。『ART 歌舞伎—自らの存在価値を求めて—』は、(株)パナソニックによる8K作品のテーマとして選出

された「ART 歌舞伎」を、高精細・広色域という8Kの特徴を生かして制作した新たな映像作品。世の中の大きな変化に直面した2020年、新しい時代に向けた歌舞伎の表現を模索していた歌舞伎俳優の中村壺太郎氏が、本来、舞台を主とする歌舞伎を新たに映像作品として表現することに挑んだ。作品に込められた壺太郎氏とクリエイティブスタッフの想い、さらに「生」をモチーフとした美しい世界観を、パナソニックの最新8Kカメラで撮影した。なお、同作品の4Kバージョンが、同社のWebサイト (<https://panasonic.co.jp/cns/pvi/>) で視聴できる

### その時々最先端技術・機材でエンタメコンテンツを制作

パナソニック映像では6年ほど前から毎年、“高画質”をキーワードに、その時々最先端技術や映像機材を用いてエンターテインメントコンテンツを制作しており、2021年はパナソニックの最新8Kカメラを用いてコンテンツ制作を行うことになった。これまでは展示会など様々なシチュエーションで活用できる「汎用性の高いコンテンツを」というニーズに応えるため、海外で撮影するケースが多かったが、コロナ禍の影響により、国内で制作することになったという。

プロデューサー・ディレクターの安楽直樹氏は「パナソニックの最新プロジェクターは“赤”の再現性が優れていることが特徴です。また、8Kでは、これまでは出せなかった高輝度域の“緑”を表現できる。これらの特徴が活かせる素材として「歌舞伎」はどうかと考え、「ART 歌舞伎」をオンラインで配信している中村壺太郎さんにお話を伺いました。コロナ禍によって公演がすべて中止となってしまいましたが、「こんな時期だからこそ、歌舞伎界とは無関係だった人たちと



8K映像『ART 歌舞伎—自らの存在価値を求めて—』企画制作：パナソニック(株)、パナソニック映像(株) プロデューサー、ディレクター：安楽直樹／プロダクションマネージャー：稲井くるみ／制作：松尾尚毅／撮影監督：有住紀重／カメラマン：手塚康行、渡邊拓海／カメラ助手：末積寛大、大友大輝、濱本凜／DIT：中村貴志、澤村厚志／編集：佐藤倫子、丹美由紀／音声・MA：野田稔晃／特機：(株) NKL／企画協力：KSR.Corp／協力：松竹(株)、(株)アロープロモーション

コラボレーションして、何か新しいことがしたい」と「ART 歌舞伎」を始めた熱意を、8Kの高画質・高色域によって表現してみたいと思いました」と振り返る。

当初は2020年夏に行った配信イベントの再演を8Kで撮影し、壱太郎氏や「ART 歌舞伎」を支えるスタッフ陣の映像などを含め、「ART 歌舞伎はどのように作り上げていったのか」を見せていく計画だったが、配信では約1時間だった演目から8K映えする最大のハイライト部分の振り付けを壱太郎氏が再編し、約半分がオリジナルの設えになっているという。

安楽氏は「空間演出については、「ART 歌舞伎」のスタッフを手配してもらい、私たちの要望などを聞いてもらった上で再構築しています。いきなりART 歌舞伎から入るのではなく、オープニングの約1分間は伝統的な歌舞伎衣装で登場してもらい、ラスト3分間で盛り上げていく構成を提案しました。例えば、舞台上でレーザーを活用するなど、今までできなかった高輝度域の“緑”を表現すること。“赤”を表現するため、冒頭の衣裳も赤地に金の刺繍が入ったものとし、舞台上には色鮮やかな花壇を配置しました。一方、高輝度域の“緑”を表現するため、舞台上で緑色レーザーを組み合わせてホタルのように見せるなど、8K映えする映像にしたいと考えました。また、8K映像は晴れた昼間に順光で撮るのが王道ですが、あえて夜間に屋外で撮影しました。衣裳やメイク、美術などについては、それぞれのプロフェッショナルが持つ「ART 歌舞伎はかくあるべき」という想いを尊重しました」と説明する。

### 山梨・身曾岐神社の能楽堂で撮影

撮影は2021年3月22日、山梨県の身曾岐神社にある能楽堂で行われた(写真下)。コロナ感染が少し落ち着き、4月から緊急事態宣言に入る直前という奇跡的なタイミングだったという。〈HDR表現の効果を高めるために篝火を焚きたいこと、能楽堂の前に池があっ



て舞台の演技や池のさざなみがきれいに映り込むこともあって、山梨で撮影することを決めました》(安楽氏)

スタッフは総勢で約 100 人。撮影は撮影監督、カメラマンが 2 人、助手が 2 チーム分、フォーカスマンと DIT、VE が各チームに 1 人ずつの体制となったほか、クレーンなどの特機部が加わった。能舞台の前にある池によってカメラとの距離が想像以上に遠かったため、B カメはレールを敷いてテクノクレーンを舞台に伸ばし、正面からのアングルを全て撮影していく一方、A カメはフレキシブルに動きながら撮影できるよう配置した。カメラはパナソニックが開発したセンサーを搭載した 8K カメラのプロトタイプ×2 台、レコーダーはブラックマジックデザインの HyperDeck Extreme 8K HDR を使用した。音声は、最終的にスタジオでレコーディングした音源を使用し、パナソニック映像の MA スタジオで仕上げているが、現場にも録音部が同行し、同録と環境音の収録を行った。



撮影風景

### 撮影のポイントはフォーカスと機動性

テクニカルグループ 撮影チーム チームリーダーの中村貴志氏は〈通常の撮影と違い、舞台照明はコントラストが強く、スポットライトを当てた部分が明るくなってしまうため、舞台を撮るのはすごく難しいのですが、今回は 8K の広いダイナミックレンジを生かしてきれいに撮影できたと思います。また、色の再現性などを現場で確認しつつ、カメラにできるだけ情報を収めることができたと考えています〉と語る。

収録フォーマットは ProRes 422 HQ/V-Log。ARRI/ZEISS MASTER PRIME (単焦点レンズ) や Alura (ズームレンズ)、フジノンレンズなど様々なレンズを使用している。〈本当に“生もの”というか、進化途上のカメラなので、カメラとしっかり会話しながら使っていく必要がありました〉と中村氏。

撮影は通して 5 テイクのほか、楽器全パートの別撮り、手元だけの寄り、インタビュー映像なども収録し、素材量は合計 32TB に及んだという。

中村氏は、撮影上のポイントとして、「フォーカス」と「機動力」を挙げる。〈8K では 4K 以上にフォーカスがシビアなので、各カメラにフォーカスマンを付けました。ATOMOS の SUMO で確認しながら現場で様々な情報を確認しながら撮影しました。センサーサイズがどんどん大きくなってきているのでフォーカスも合いにくくなっているし、演出的には絞りを開けたほうがボケ味などもよいのですが、今回は夜の暗い環境だったので絞り込めない部分もあり、苦労しました。さらに、



前年同様、オンライン & VR 空間で開催された「ルミエール・ジャパン・アワード 2021」の授賞式。安楽直樹氏がアバターで特別賞の表彰を受けた。審査委員の谷島正之氏は『ART 歌舞伎—自らの存在価値を求めて—』について、〈8K による“巨大さ”の映像空間はまだ未知、開拓途上と捉えると、これからもワクワクすることが沢山あると思う。「4K および 8K、高精細映像の活用法とは何か?」の、飽くなき挑戦に期待したい。見せて欲しい、教えて欲しい。なぜなら、自分自身がまだ、ままならないからだ〉と評している。

いかに事故を起こさずに機動力をアップするかがポイントです。各種システムを1つにまとめてマグライナーに積み込み、いかにスピーディに動けるかを工夫しました。また、光ケーブルの扱いにも注意しました。普通の撮影でBNCケーブルが切れるのとは違い、光ケーブルが折れてしまうと全く信号が伝わりませんから〉(中村氏)

見えすぎて怖い。撮られる側も考えなければ…



撮影終了後、素材をHDにダウンコンバートして安楽氏がオフライン編集を行い、そのXMLを用いてオンライン編集およびカラーグレーディングが同社東京オフィス「Studio3」(←写真)で行われた。今回、合成作業はなかったが、高輝度ノイズの除去の後、最終的な仕上げとして「Rio 8K」でカラーグレーディングおよび最終マージを行い、完パケしたという。なお、今回はHDR版(PQ)のほか、オリジナルLUTによってSDR版も作成している。ポストプロダクション期間は約1週間。編集自体には時間がかかっていないものの、32TBにのぼる素材立ち上げに3～4日、カラーグレーディングに3日、書き出しに3～4日を費やしている。完成版を試写した壺太郎氏や床山さんなどは「見えすぎて怖い。撮られる側も考えなければ…」との感想を漏らしていたという。〈特に、男性が女性を演じる歌舞伎の流れでは、ちょっと非現実的に映りたい部分もありますが、それが全て見えてしまうので、「従来の考えを改める必要がある」とおっしゃっていました〉(安楽氏)

### 8K サービスをトータルに提供

今後の8K制作への取り組みについて、中村氏は〈技術に携わっている以上、常に最新技術に触れていることに喜びを感じています。SDからHD、4K、8Kへと進化する技術にその都度対応してきましたし、8K制作に関してもこれまでに英国・スコットランドやアメリカ・ニューオリンズ、ウズベキスタン・サマルカンドなどでの実績を有しており、ノウハウも蓄積できており、オファーがあればすぐにでも対応できる体制となっています〉。安楽氏は〈8K映像は大型映像に向いているのではないかと考えています。液晶の大型ディスプレイなどで視聴する際には8Kからダウンコンバートした4K映像は非常にきれいですし、8Kから一部を4Kで書き出すといった用途にも適していると思います。今後も8Kに限らず、今後出てくる新しい技術の情報をしっかりとキャッチし、それらを最大限活用しながら制作していきたいと考えています〉とする。



中村貴志氏(左)と安楽直樹氏(右)

また、取締役の竹内誠一氏は〈当社には8Kによる取材からコンテンツ制作まで8Kサービスをトータルに提供できる体制が整っています。8Kそのままを使用する業務だけでなく、8Kで撮った映像を4Kで活用したいというニーズにも応えていきたい〉と話している。

◇パナソニック映像 <https://panasonic.co.jp/cns/pvi/>